

古書の愉しみ（令和三年六月）

土屋 博

一「維新志士遺芳帖」

（國民新聞社藏版、同文館發行、明治四十三年刊）

縦三十六糎、横二十六糎、和綴。本書は上野公園にて開催せられたる國民新聞社主催「維新志士遺墨展覽會」の出品作をベースとしたるものなり。山内容堂の漢詩、和歌、武市半平太の自畫像、山水畫、美人畫、坂本龍馬の書翰、武田耕雲齋の和歌、藤田小四郎の自畫贊、佐久間象山の櫻賦、山水畫、橋本左内の書翰、高山彦九郎の借金證文、頼山陽の手稿などの寫眞及び詳細なる解説を含む豪華本なれば、一生の寶とすべし。

二「維新志士正氣集」國民新聞社編輯

（民友社、明治四十四年刊、特價五圓）

縦三十三糎、横二十二糎、和綴。徳富蘇峰、序に曰く、「方今青春妙齡の徒口を開けば耽溺を語り利那的行樂を説く。乃ち天下國家の大事忠孝節義の偉蹟に至りては雲烟一抹に附し漠然相關せざるものゝ如し。嘆ぜざるを得ん哉。是れ維新志士正氣集編述の己む可らざる所以也」と。本書は前出遺芳帖を基礎とし、追加資料を大幅に追加し、詳細なる解説を附したるものなり。「遺芳帖」よりも情報量は遙かに勝れり。

三「勤王文庫第四編傳記集」

（大日本明道會、大正八年刊、定價金三圓五拾錢、五六一頁）

天金。凡例にある如く、傳記集といはんより寧ろ幕末維新の當時に國事に奔走せし諸子の自ら記録せしものうちより採録したるものと言ふべし。

藤田東湖「常陸帶」、吉田松陰「時勢論」・「留魂錄」、大久保利通「萬延日記」、西郷隆盛「獄中書簡」、高杉晉作「獄中手記」、岩倉具視「義裡鳴蟲」、木戸孝允「自敘録」などを収録す。綺羅星の如き英雄の文章茲に一堂に會するを眺むるは格別の心地とする。

四「勤王文庫第五編詩歌集」

（大日本明道會、大正十四年八版、定價金五圓、歌集三六九頁＋詩集二九一頁）
天金。初版は大正十年。人名の排列は五十音順に依る。

凡例に曰く、「詩歌の選択は王事國事に關するものを主とし單に花鳥風月を吟詠したるに過ぎざるものは人口に膾炙せるものと雖も必ずしも之を採らず」と。

勤王家歌集（福井久藏編）は、作者五十音順に、青木新三郎（あさゆふに君がみためと思ふよりほかに心はたもたざりしを）、青柳蒨内（かき送る我が手ながらもなつかしや戀しき人の見んと思へば）より渡邊内藏太（はや咲けばはや手折らるる梅の花きよき心をきみにしらせて）、渡邊眞菅（惜しめども散りゆく花は式島のやまところの人に見よとか）まで。

勤王家詩集（平野彦次郎編）は、矢張り作者五十音順に、鮎澤伊太夫「失題 腥風搖屋外」、會澤恒藏「逸題 雄藩元欲育書生」より、頼三樹三郎「過箱根 當年意氣欲凌雲」、若江薫子「囚中即事 囚居窗外雨如絲」、渡邊内藏太「失題 人間行路盡風流」まで。

五「勤皇文庫 全五卷」特製本

（財團法人社會教育協會、昭和十六年二月再版、各定價金貳圓貳拾錢、第一卷六二八頁、第二卷五七六頁、第三卷六一三頁、第四卷五八二頁、第五卷三三三頁十二五四頁）

初版は大正八年。

第一卷御聖德篇。

第二卷教學篇上。

第三卷教學篇下。

第四卷志士文篇。

第五卷勤皇家詩歌集。

大正期名著の豪華復刻版なり。タイトルは「勤王」文庫より「勤皇」文庫に変更せらる。

第一卷御聖徳篇目次は、神敕、御謚號年號御陵、御歴世詔敕集（神武天皇の橿原宮を建つるの令ほか）及宣命集（景行天皇の磐鹿六鷹命の靈に告げ給へる宣命ほか）、御製集（神武天皇御製の「神風の伊勢の海の大石にはひ廻ろふ細螺おひしのい這もじほひもとほり撃ちてし止まむ」ほか）、宸翰集（宇多天皇の「醍醐天皇を誠め給へる御書」ほか）、皇室典範及憲法より成る。

第二卷教學篇上の目次は、日本書紀神代卷、十七條憲法（聖徳太子）、大化改新の詔の奉答（中大兄皇子）、神皇正統記抄・關城書（北畠親房）、陽復記（度會延佳）、中朝事實（素行）、大日本史序（徳川綱條）、創倭學校啓（荷田春滿）、國意考（眞淵）、奉公心得書（竹内式部）、柳子新論（山縣昌貞）、玉くしげ・臣道（宣長）、今書（蒲生秀實）、玉襁抄（平田篤胤）、桃岡雜記（八田知紀）、學範（中林成昌）などより成る。

第三卷教學篇下の目次は、神道明辨（度會常彰）、直日の教（小寺清光）、離屋學訓（鈴木朗）、弘道館記（徳川齋昭）、弘道館記述義（東湖）、士規七則・幽囚録（松陰）、下學邇言抄（會澤安）、皇學意見（長谷川昭道）、正道論、神學教訓抄（浅井家之）、皇道論（池田瑞英）、國基（座田繼貞）、靈能一都羅（松木直秀）、古道提綱概略（堀秀成）、固本策（渡邊重石丸）、古道或問（柴田花守）などより成る。

第四卷及び第五卷については、既に紹介せる大正出版本とほぼ同一内容なり。

六「先賢遺芳 維新志士遺墨集」京都府廳編纂

(更生閣、昭和四年四版、定價金拾圓、一三三二頁)

帙入り、豪華和綴。「賜天覽」の印あり。

凡例より、「本書は大正十四年五月聖上陛下未だ東宮に在して京都に行啓ありたる際、御所内新御車寄を拜借して陳列、台覽に供せし先賢の遺墨を輯録して印刷に附せしものなり」と。

藤原肅(藤原惺窩)、林又三郎(林羅山)より、西郷隆盛、春日仲襄までの四十二名を収録す。(伊藤仁齋、本居宣長、頼山陽、三條實美、岩倉具視、佐久間象山、坂本龍馬、木戸孝允、大久保利通らを含む。)

玉勝間四の巻の本居宣長手稿の寫眞あり。この書編述の趣旨を述べたる重要な箇所なり。

「からぶみの中に、とみにたづぬべき事の有て、思ひめぐらすに、そのふみとばかりは、ほのかにおぼえながら、いづれの巻のあたりといふこと、さらにおぼえねば、たゞ心あてに、こゝかしことたづぬれど、え見いでず、さりとていとあまたある卷々を、はじめよりたづねもてゆかむには、いみしくいとまいるべければ、さもえ物せず、つひにむなしくてやみぬるが、いとくちをしきまゝに、思ひつゞけゝる」云々。本居宣長(一七三〇年生、一八〇一年歿)の「玉勝間」を書き始めたるは六十四歳の頃とぞ。我も老境に居れば身につまさるる心地とする。

七「頼山陽先生眞蹟百選」木崎愛吉編纂

(審美書院、昭和六年刊)

縦三十八糎、横二十六糎、和綴帙入。題字清浦奎吾、序文徳富猪一郎。門人大雅堂義亮及び田能村竹田筆の肖像畫を冒頭に掲ぐ。天明六年正月二日七歳の新年試筆より、天保三年九月廿一日五十三歳の絶筆書翰までを収録す。徳富蘇峰、序に曰く、「有體に云へば、山陽は大名や何かの御抱儒者の如く經書の講釋で飯を喰つた漢で無い。一生

を通じて飯の種は書であつた」と。著者の木崎氏曰く、「予少年にして郷師澤口保先生に就き日本外史の句讀を受く。日課の終る毎に先生便ち藤紙を展べ、山陽墨帖を披きて山陽先生の書風に親しまずんばその文その人並びに語るべからずと諭されたり」と。

八「山陽先生百年祭記念 遺芳帖」

(廣島縣廳内頼山陽先生遺蹟顯彰會、昭和六年刊)

縦三十八糎、横二十八糎、和綴帙入。昭和六年先生歿後百年を記念して東京三越にて展觀せる逸品を影寫輯録して帖子と爲したるものなり。本山竹莊氏所藏の山陽銅像、松平子爵家所藏の上樂翁公書及び日本外史手稿本二十二冊、大倉男爵家所藏樂府日出處、服部金太郎氏所藏耶馬溪詩畫双幅など、計百三十三品の寫眞收録せられたる美本なり。

九「古事記辭典」村林孫四郎著

(錦正社、昭和十八年再版、定價六圓五拾錢、八一七頁)

初版は昭和十七年なり。序言に曰く、「古事記は神統及皇室の御系譜を經とし、各種の神話傳説を緯とし、一貫せる皇室中心の國家的精神を以て撰録せられたるものにして、天壤無窮の我が皇國史の源をなす。過去に於て皇國民の進むべき方向を示し來れるが如く、現在及將

來に於ても皇國民生活の指導者たるべき最高の古典は古事記なり。この意味に於て古事記は皇國民必讀の書たらざるべからず。微力ながら本書はその案内者たらむとするものなり。」と。

本書は言語の辭書のみならず、人名、地名等事項辭書も兼ねたり。収録語は、「あ」

(畔)、「あ」(吾)、「ああしやくしやく」(嘲りの聲)、「赤色」より「をろがむ」(折れ屈

む意にして拜むに同じ。」「をろち」（遠呂智にて大蛇をいふ。）まで五十音順に解説せしむ。

著者は長崎縣大村の生れ、明治三十七年に鹿兒島に移り住み、鹿兒島方言の研究を鹿兒島新聞紙上に連載し、「鹿兒島語法」なる書籍を著したる人物なり。

（令和三年六月十三日受附）